

原著

*Decline and Fall*と*Nicholas Nickleby*:
Charles Dickensから読み解く Evelyn Waugh

山 崎 麻由美

**A Comparative Study of *Decline and Fall* and
*Nicholas Nickleby***

Mayumi YAMASAKI

SUMMARY

Decline and Fall owes to *Nicholas Nickleby* in the plots and the characters. Both are picaresque novels, where young protagonists have various kinds of experiences. By comparing and contrasting *Decline and Fall* with *Nicholas Nickleby*, therefore, we can see clearly what makes two protagonists different from each other, and what the differences meant to Waugh.

Paul Pennyfeather, a theological student at Oxford, enjoys a Victorian ordered life achieved by industry. Then, innocent as he is, he is sent down and plunged into an anarchic world, where he encounters a lot of eccentric people. The world has no ethical order, and there men are ridiculously eager to appear to be gentlemen.

The difference between Paul and Nicholas, who is also a poor orphan, is that Nicholas has met good and reliable substitute fathers who lead him up into a better world, while all the men Paul meets are irresponsible. Paul, after he has been tossed back and forth in a series of bizarre adventures, just returns where he started. The fruitless circularity of his experiences leaves Paul unaffected. Paul is happy with his unchanged life, for he safely restores his old peaceful Victorian way of life. His Victorian middle class faith echoes Waugh's.

KEYWORDS: a picaresque novel, gentleman, father

序

19世紀末から20世紀にかけての作家達の多くが Charles Dickens (1812-1870) を感傷的だ、俗物

だと否定してきた。Evelyn Waugh (1903-1966) も例外ではない。彼自身が残した Dickens に関する記述はごく僅かであり、作品の感想を述べたものとしては妻に宛てた手紙がある。"I have just

read *Dombey and Son*. The worst book in the world” (1945年1月23日)しかしWaughほどDickensとの類似点が明らかな作家もいない。これは父親からの影響と考えられている。父Arthur WaughはDickens Fellowshipの会長も務めたことのあるほどのDickensianであった。Waughは自伝*A Little Learning* (1964)の中で友人のひとりがArthurのことを“dear little Mr Pickwick”と呼んでいたことを思い出している(70)。WaughにとってDickensの作品やその醸し出す世界は身近なものだった。作家になってからは意識的にDickensから遠ざかろうとしたようだが、結局WaughはDickensを自分の作品から完全に排除することが出来なかった。ことに初期の作品にはDickensからの影響があからさまに現れている。本稿はWaughの*Decline and Fall* (1928)をDickens作品や登場人物を鍵として読み、解釈を与えていくものである。特にDickensの*Nicholas Nickleby* (1838-39)を中心に見ていきたい。*Decline and Fall*はWaughが25才、*Nicholas Nickleby*はDickensが26才という共に青年期に書かれた作品であること、物語の枠組み、登場人物像などの類似点があること、作品出版の約1世紀の隔たりがそれぞれの時代的差異を際立たせていることから、両作品を比較する意味を見出すことが出来るからである。

1 手法の類似と視点の相違

Waughの作品に現れたDickensといえば*A Handful of Dust* (1934)がまず思い浮かぶ。Dickens好きな異常な老人Toddは強烈な存在感を読者に与える。しかし、全体としてみると*A Handful of Dust*よりも*Decline and Fall*にDickensとの類似性が明らかに表れているのである。

まず主要登場人物達がDickensの登場人物を髣髴とさせる。主人公Paul Pennyfeatherが最初に行き着く先の学校Llanabba CastleではJacqueline McDonnellが指摘するように“…all members of staff are Dickensian grotesques” (McDonnell 46)

である。校長のFaganは名前からして*Oliver Twist*のFaginであるし、校長の二人の娘FlorenceはDotheboys HallのFanny SqueersそしてDianaはMrs Squeersを思い起こさせるのである。FlorenceとDianaはそれぞれ愚かしさと吝嗇さが滑稽に誇張されて描かれている。また名前がその人物の属性を表しているのもDickensのよく使う手法である。例を挙げるとPennyfeather、Captain Grimes、Florenceの愛称Flossie、Dianaの愛称Dingyなどがそれに当たり、陳腐ではあるが滑稽味を出している。

Llanabba Castle自体をWilliam Myersは“owes a lot to *Nicholas Nickleby*” (Myers 7)と指摘する。誇張された描写も相まってこのWalesの無茶苦茶な学校はYorkshireのDotheboys Hallを思い出させるのである。そもそも“Hall”や“Castle”などという大げさな名前が付けられていることから両者相通じる胡散臭さを感じる事が出来るだろう。どちらも学校とは名ばかりで校長の金儲けの道具に過ぎなかった。Dotheboys Hallは親に疎まれている子供達を格安で引き取る。WalesのLlanabba Castleは普通のパブリックスクールに在籍することが能力的に無理な子供達を受け入れている。どちらも親が子供を通わせていることを秘密にしておきたい学校である。当然のことながらどちらの学校でも、まともな教育は行われていない。教員として採用される前のそれぞれの校長との面談場面が学校のお粗末さを物語る。Dotheboys Hallで横行しているのは虐待であった。20世紀のLlanabba CastleではDotheboys Hallのような暴力による虐待はない。しかし他の学校をホモセクシュアルの理由で追われたGrimesが教鞭をとるような学校なのである。

以上のように*Decline and Fall*は*Nicholas Nickleby*との類似点が見受けられる。これは偶然ではなく子供時代に触れていたDickensの影響と考えることが出来るだろう。Waughは幼い頃遊びに行った友人の家について“The household was extraordinarily

Dickensian, an old, new world to me” (*Little Learning* 58)と述べている。主語をLlanabba Castleに置き換えるとまさしくDickens的描写の説明になるではないか。

しかし*Decline and Fall*と*Nicholas Nickleby*では作者の視点が決定的に異なっている。Dickensは生涯にわたり作品の中で社会の不正や矛盾を追及していった。Dotheboys Hallを描くにあたって学校の実態を取材してまわったのである。*Nicholas Nickleby*連載中にはDotheboys Hallのような学校を経営する人物達から抗議や脅しが多数寄せられた。彼は初版の序文でそのことについて触れ、怯むことなく毅然とした姿勢を表明している。一方*Decline and Fall*では学校だけでなく上流社会や牢獄も舞台となっているが、その描き方は風刺やパロディーの域を出ない。登場人物が実在人物をモデルにしているとの苦情を避けるため、Waughは*Decline and Fall*を出版するにあたって次のような前書きをつけた。“In fact I have never met anyone at all like any of the characters … Please bear in mind throughout that IT IS MEANT TO BE FUNNY” 出版社の意向であったとはいうものの(Stannard *The Early Years* 161)、Waughには社会悪を糾弾しようという意識どころか知人からの苦情に向かい合う気もなかったことは明白である。

WaughとDickensの作家としての姿勢の違いが*Decline and Fall*と*Nicholas Nickleby*の主人公達にも表れてくるのは当然と言えよう。正義感が強く悪徳校長Squeersを打ちのめしてDotheboys Hallを飛び出したNicholasとLlanabba Castleで初日から手抜き授業をするPaulは、図らずもそれぞれの作者の姿勢を映し出して興味深い。

2 ピカレスク小説としての枠組み

*Decline and Fall*の形式について様々な解釈がなされている。David Lodgeは「楽園喪失」のmythであるとし(Lodge 46)、Frederick Beaty

は“an ironic parody of the Bildungsroman” (Beaty 32)だと述べ、George MaCartneyはPaulの遍歴を“the epic journey”のパロディーだと述べている(MaCartney 92)。またClementはPaulが世間を欺くために死亡したことにする場面を取り上げ、King Arthurの物語を下敷きにしていて“quest-motif”の物語のパロディーだとする(Clement 35)。どの解釈にも一理あるが、Waugh自身はピカレスク小説を念頭に置いていたようである。彼の友人でもあった作家Anthony Powell(1905-2000)によると*Decline and Fall*を書き始めた頃、Waughがつけていたタイトルは*Picaresque: or the Making of an Englishman*であったという(Powell 130)。

確かにピカレスク小説の主人公同様Paulは遍歴の旅に出る。しかし*Decline and Fall*はタイトルが表すとおり彼の転落の物語なのだ。ピカレスク小説のパロディーである。PaulはOxfordのScone Collegeで学ぶ地方出身の凡庸な神学生で、“uneventful”(11)だが規則正しい生活に満足している。食事から日々のささやかな楽しみにいたるまで自分で決めたことを守る秩序正しい生活ぶりであった。金銭的なゆとりがなくつましい生活を余儀なくされていたとはいうものの、贅沢をしないという気持ちもなく飲酒で羽目を外すというようなことも皆無であった。まるでヴィクトリア時代の中産階級の生活規範を実践するような勤勉な生活ぶりだったのである。ところが彼は上流階級の子弟のクラブBollinger Clubが学内で乱痴気騒ぎをしている場面にあたまたま遭遇してしまい、酔っぱらった彼らにズボンをはぎ取られる災難に見舞われる。その姿を見咎められて「ふしだらな行為」をしたかどで大学を放り出されてしまうのだ。無一文の彼の放浪はWalesのお粗末な学校Llanabba Castleに教師として赴任することから始まった。そこで教え子の母親Margot Beste-Chetwyndeと恋に落ち、大富豪のMargotと結婚すべくロンドンへ出て上流社会の生活を束の間経験する。その

間Margotが陰で糸を引いていたwhite slavery組織に関わることになる。そのため結婚式直前に逮捕され、牢獄生活を送ることになってしまう。しかしMargotの手引きで、病死したと書類上で処理され牢獄生活から抜け出す。そして彼は以前在籍していたPaul Pennyfeatherの遠い親戚というふれこみで、かつて放校にされたScone Collegeに戻る。彼が元のような静かな生活を送っていることが読者に示され作品は終わるのである。

一方Nicholas Nicklebyがイギリスでは18世紀に流行ったピカレスク小説の形式をふまえていることは明らかである。Paulとは正反対にNicholasの人生は波乱に富んだ出世物語である。彼は父親の死を契機に母と妹を連れ父の兄Ralphを頼ってデヴォンシャーの田舎からロンドンに出てくる。この叔父が腹黒い人間で、若く率直な甥を嫌い体よくYorkshireの学校に厄介払いをしてしまう。Dotheboys Hallの教員を皮切りにNicholasの遍歴は始まるのである。彼は悪徳校長を倒し学校を飛び出した後、旅芸人一座に加わり、文字通り自分の足で歩きながらの旅を続けていく。その間ロンドンに残した妹Kateに魔の手が忍び寄ったり、Dotheboys Hallからの連れとなる頭の弱いSmike少年の過去が明らかになったり、Nicholas自身が恋に落ちたり、善意の仲間と出会い助けられたり、と見せ場続きで最後は愛する娘と結ばれ妹も良縁を得る。しかも恩人の会社で働き、ついには共同経営者にまでなるという大団円で幕を閉じる。

同じ青年主人公の遍歴という形をとっているにも関わらず、*Decline and Fall*は転落の物語、*Nicholas Nickleby*は上昇の物語になっている。その違いはどこから来るのだろうか。それには二つの要因が考えられる。まず一つの要因は主人公達が属している世界の違いである。Nicholasは秩序ある世界に生きている。作品中では善人と悪人の区別がはっきりし、正しい者が勝利する世界である。善人の世界に属するNicholasは社会の底辺層を経験し苦労を重ねるが、最後には裕福になり幸

福な生活を手に入れる。一方の*Decline and Fall*で描かれている世界はanarchyとbarbarismが支配する混沌とした世界である。Paulの漂い行く先はでたらめな教育を行っている学校、欺瞞に満ちた上流社会の社交生活、そして牢獄といずれも退廃し閉塞した世界である。善と悪の対立はなく、また道理が常に通るとは限らない世界である。多くの批評家が指摘するとおりPaulの遍歴は、転落していくが最後にはOxfordに戻るという「円」を描く軌跡になっている。同じ場所に戻るというだけではなく、象徴的な意味を含んでいるのである。Frederick J. Stoppが指摘するようにPaulのalter egoでもあったPottsの代わりにStubbsという新しい友人が出来る。価値観もそっくりならその名がmonosyllabicなところまでPottsと同じである(Stopp 69)。また物語の始まり同様にBollinger Clubの馬鹿騒ぎで物語が終わっている。つまりこの円を描くような人生遍歴は彼の人生が完璧であることを意味しているわけではない。むしろ発展性のない堂々巡り、円の外へは抜け出すことの出来ない閉塞感を表しているのである(Kernan 89)。

もう一つの要因は主人公の人物像の違いである。Paul Pennyfeatherは作者自身に「ヒーローにはなれない人間」と断言される存在である。“…as the reader will probably have discerned already, Paul Pennyfeather would never have made a hero, and the only interest about him arises from the unusual series of events of which his shadow was witness” (122)。Paulには野心も気概も感じられない。作者自身に“shadow”と言い切られてしまう存在感の薄さである。それがPennyfeatherという名字にもあからさまに象徴されている。他からの影響を受けて羽根のように飛んでいく運命を初めから作者によって背負わされているのだ。血の気が多いが自ら行動を起こし正義感に溢れているNicholasとは雲泥の差が生じるのは当然と言えよう。

しかしPaulが“hero”たり得ないとすると*Decline and Fall*に“hero”は存在しないのだろうか。ピカレスク小説の形を取っているにもかかわらず冒険をする主人公は不在なのだろうか。実は*Decline and Fall*の中にはピカレスク風の立身出世物語の主人公は歪んだ形で存在しているのである。混沌とした世界で“hero”であるにはやはり一癖もふた癖もあることが必要となってくる。*Nicholas Nickleby*では善人が報われ成功の階段を上っていく。しかし*Decline and Fall*の閉ざされた世界で成功者と呼べるのは、正しきこと善きこととは無縁の三人、つまりGrimes、Fagan校長、そしてPhilbrickであるという皮肉な構図が浮かび上がってくるのだ。この三人は従来出世物語を揶揄する形で*Decline and Fall*の成功者たちになっているのである。どんな困難からも生き延びるGrimesのしぶとさはPaulをして“…Grimes…was of the immortals. He was a life force” (199)と言わせるエネルギーにあふれる男である。またFagan博士もしたたかな人物である。彼はLlanabba Castleの経営に行き詰まると、世間をどのようにごまかしたのか療養所経営の医学博士としてPaulの前に姿を現し、更に時を経てベストセラー*Mother Wales*の著者としてOxfordの書店でPaulの目にとまる。教育者から医者さらに作家へと状況に応じて見事に転身を遂げていくのである。ペテン師Philbrickはとりわけ興味深い。彼の紡ぎ出す嘘の身の上話の数々は、それ自身短い冒険物語になっているからである。またOxfordに戻ったPaulは羽振りの良さそうなPhilbrickと再会する。街角で自転車に乗ったPaulの横をロールスロイスの後部座席におさまった良い身なりのPhilbrickが通り過ぎていくのである。彼の現在の生活も恐らく嘘で固めたものであろう。しかしLlanabba Castleの執事という使用人だったPhilbrickが途中詐欺罪で投獄されるということを経て、運転手つき的高级車に乗るような身分に登りつめたのである。彼こそ典型的なピカロといえるだろう。

3 gentlemanであること

PaulとNicholasには共通点もある。共に「gentleman階層に属していること」である。*Decline and Fall*と*Nicholas Nickleby*をgentlemanをキーワードにして読んでみると時代の違いだけではない差異が明白になってくる。

gentlemanは時代の流れとともに変化してきた概念である。元来は貴族や地主などgentryを指していたが、16世紀頃からgentryのみならず内科医、法廷弁護士、軍人などある限られた職業に就く者もgentlemanとされるようになってくる。パブリックスクール、あるいはオックスブリッジ卒業者でない階層である「ノン・ジェントルマン」の職業は商工業ブルジョワ階級、職人、農民などであった。そのため金満家の商工業ブルジョワ階級は事業が成功すると、田舎に土地を購入してgentryつまりa country gentlemanに成り上がっていくのが普通であった。しかし、もちろんgentlemanというのは階層だけの問題ではなく、「ジェントルマンの理念」も満たさなければならぬ。その理念とは教養を身につけ作法礼節をわきまえていることである。*Decline and Fall*で描かれているgentlemanは主にこの理念の部分を表しているものである。

Jeffrey Heathは*Decline and Fall*について次のように述べている。“Waugh astringently satirizes what Paul encounters: the Establishment’s education system, the state church, high society, the legal system, politics and politicians, the penal system and the nineteenth-century idea of gentleman” (Heath 247)。Nicholasが、貧しくても「紳士の息子」であることを誇りに思いひどい境遇でもそれを支えに生きていったのに比べ、羽のように軽いPaulはOxford大学にいる間は紳士のように振る舞うことが出来たが、環境が変わればすぐに紳士たる誇りを捨ててしまう。次のエピソードがそれをよく表しているといえるだろう。

Oxfordでの学友であったPottsが、Llanabba Castleで教鞭を執り始めて間もないPaulに手紙をよこす。Paul放校のきっかけを作ったTrumpingtonという男が「Paulに迷惑をかけたので、お詫びに£20送りたいと申し出ている」という内容であった。Pottsは憤慨した口調で「紳士に対する申し出ではない」とTrumpingtonをやり込めたと手紙に書いてきたのだ。Paulはその£20が喉から手が出るほど欲しかったにもかかわらず、申し出を断る決心をする。彼はGrimesにこう話す。“…there is my honour. For generations the British bourgeoisie have spoken of themselves as gentlemen, and by that they have meant, among other things, a self-respecting scorn of irregular perquisites… Now I am a gentleman… it’s born in me. I just can’t take that money” (44) その時のGrimesは人を食った返答をする。彼はPaulが断ると予想して、金を受け取る旨の返事を勝手に出していたのである。“I’m a gentleman too, old boy… and I was afraid you might feel like that, so I did my best for you and saved you from yourself” そのことを知った時、PaulはGrimesを非難するが、実は内心非常に嬉しく思うのであった。紳士の理想など忘れ去り、結局その20£を同僚達との飲食に使ってしまう。

Paulに限らず*Decline and Fall*にはgentlemanにこだわる人物が多い。Berberichは“*In Decline and Fall*… all of them striving to be or at least appear—an important distinction—to be gentlemen” (Berberich 47)と指摘する。そのひとりにはFagan校長である。彼にとってgentlemanであることは重要な問題なのである。生徒の一人が校則違反の喫煙をしていることを見つけた校長は激怒する。喫煙行為そのものではなく、それが安物の葉巻であったことが彼の気に障ったのである。“It is not a gentlemanly fault” だというのである(36)。また娘がGrimesと結婚したいと知った時に“I could have forgiven him [Grimes] his wooden

leg, his slavish poverty, his moral turpitude, and his abominable features; if only he had been a gentleman” (96)と不平を漏らす。結局Grimesは新婚早々この義父にことあるごとにgentlemanでないことを当てこすられ、それが耐え難くなり逃げ出してしまふ。その校長自身が到底gentlemanとはいえない俗物であるところに皮肉な滑稽さが潜んでいる。

しかしFagan校長にgentlemanでない烙印を押されたGrimesが、*Decline and Fall*における似非gentleman像の実態を最も明らかに具現しているのである。彼は名前から想像できるように外見上も道徳的にも薄汚れた鉄面皮な男である。しかし彼はa public school manであることを始終口にし、人生で困った羽目に陥ると必ず母校の卒業生誰彼かから救いの手がさしのべられてきたという。彼がgentlemanの職業であった軍人であったこと、しかもCaptainであったことは彼のgentlemanの理念的な資質のなさをいっそう皮肉に浮き彫りにする結果となっている。彼は軍法会議にかけられたり、生徒相手の同性愛行為で前任校を追い出されたり、重婚の罪を犯すような男である。しかしGrimesはパブリックスクールを出ているからというだけでうまく世渡りをしていくのだ。gentlemanの対極にいるようなGrimesが*Decline and Fall*ではパブリックスクール出身者として幅をきかせているのである。

このように*Decline and Fall*には高潔なgentlemanはひとりとして出てこない。Margotを中心として集まる上流社会の男たちですら「gentlemanの理念」にはほど遠い。またOxfordのBollinger Clubのメンバーたちも身分上は申し分ないが決してgentlemanとはいえない。Paulにした仕打ちはもちろんのこと、ピアノや絵画など芸術を象徴するものを破壊することは教養や知性を破壊することになるからである(Beaty 34)。Waughはこのような俗物達を描くことで*Decline and Fall*のような世界では真のgentlemanであることは不可能に

等しいことを読者に示している。

Waugh、Dickensともに中産階級の出身だった。しかし幼い頃、だらしのない父親のせいで労働者と同じ境遇に身を落とさなければいけなかったDickensと物心ついた時から父親のまわりに文化人が沢山集まっていたWaughではgentlemanであることの重みも違っていたと思われる。Dickensは学歴がなく少年時代靴墨工場で働きに出されたつらい経験のため、余計に自分が中産階級出身であることに矜持を保とうとしていたのだろうし、作品中に理想のgentleman像を描きだそうとしたのだろう。Nicholasが妹を誘惑しようとしている不良貴族に対して言い放つ次の言葉にDickens自身の思いを感じ取ることが出来る。“I am the son of a country gentleman…your equal in birth and education, and your superior I trust in everything besides” (417) またDickens最後の長編作品*Our Mutual Friend* (1864-65)の尾羽打ち枯らした紳士Twemlowが最終章でこう述べる場面がある。“I beg to say that when I use the word gentleman, I use it in the sense in which the degree may be attained by any man. The feelings of a gentleman I hold sacred, and I confess I am not comfortable when they are made the subject of sport or general discussion” (819)。これが若い頃から変わらぬDickensの理想だったに違いない。Nicholasは商人として成功した後、田舎に家を買ってそこで暮らす。田舎に土地を持つことで名実ともにgentlemanの仲間入りをしたのである。しかしNicholasは表面上の条件だけでなく貧しい時も「gentleman理念」を忘れずに生きてきたのである。彼が血を分けた身内でありながら叔父のRalphを嫌悪し面罵するのも、金持ちではあるがRalphの心根が卑しいからである。*Nicholas Nickleby*ではgentlemanであることが社会的成功と幸福な生活への必須条件だったのだ。

4 父 親

父親を亡くしたNicholasには叔父のRalphは到底保護者にも生きる手本にもなり得なかった。しかし、Cheeryble商会の双子の兄弟が代理の父親としての役割を果たすのである。Cheeryble兄弟はNicholasと妹のKateの庇護者になり、彼らを幸せな生活へと導く理想的な父親像として描かれている。一方、悪い父親達はそれぞれ天罰を受けることになる。Smikeの父親であることが判明するRalph Nicklebyは孤独な死を遂げ、Nicholasの妻となるMadelineの父親も突然の発作で亡くなる。彼は利己的な目的で娘を年老いた守銭奴に嫁がせる直前に倒れたのだった。

一方*Decline and Fall*では孤児Paulを取り巻く男達は頼りにならない。あるいは社会規範を大きくはずれた人物ばかりである。Heathは*Decline and Fall*における問題の根元は家父長の伝統が無責任になってきたことだと述べている(Heath 72)。Oxfordの教師達は学生達がPaulに乱暴狼藉を働くのを目撃していたにもかかわらず、Paulを守ることにはしない。それどころかPaul一人に罪をきせ彼を放校する。その後Paulが関わり合いをもつ男達、例えばPaulの後見人の弁護士、Paulを娘婿にさせたがっていたFaganやMargotと結婚することになるMaltraverseにいたるまで誰もPaulのモデルになり得ないし、彼を守ってくれることもない。これは20世紀になってそれまでの家父長制度が崩れてきたことと大きなつながりがあるといえるだろう。範を垂れるべき父親たち、あるいは従来なら父親の役割を果たすべき人物が、自ら混乱や混沌の世界に身を投じているのだ。それ故、Paulの旅は導き手のいないまま円の中から抜け出せない堂々巡りになるのである。Nicholasが無事に高いゴールへと到達するのは大きな違いであった。

結 び

以上見てきたように*Decline and Fall*はNicholas Nicklebyと似たような遍歴物語の型で始まりながら、物語は完全に逆方向に向かっている。これは1世紀の隔たりがもたらす時代風潮の違いというだけでなく、Waughの個人的な問題も含まれている。Waughは*A Little Learning*で父親が自らを‘incorrigibly Victorian’ と称していたと述べている(64)。ヴィクトリア時代を揶揄しDickensを否定することによってWaughは無意識のうちに自分の父親に反発していたのだろう。しかし、新しい道を切り開いていくことは困難であった。この後のWaughの作品にもPaul Pennyfeatherと同じ遍歴のパターンを見出すことが出来るのである。*Black Mischief*(1932)、*Work Suspended*(1942)、*The Loved One*(1948)、*The Ordeal of Gilbert Pinfold*(1957)においては、男達はイギリスを出て行くものの結局何か偉業を成し遂げたという達成感もないまま出発地点であるイギリスに戻ってきてしまうのである。

「どこへも到達しない」主人公達はWaughと重なる。彼はDickensやヴィクトリア時代を批判しつつもその価値を完全に切り捨てることは出来なかつたのである。むしろヴィクトリア時代の価値観をもって生きてきたといえるのではないだろうか。そのため彼の描く世界では父の世代を批判しつつも主人公はそこから逃れられないのである。あるいはそこへ戻りたいという無意識の願望が主人公を縛っているのである。MaCartneyが指摘するようにPaulのOxfordでの規則正しい生活ぶりはまさに勤勉を旨としたヴィクトリア時代の生き方ではないだろうか(MaCartney 9)。Paulは無理矢理静かなヴィクトリア時代的生活から引きずり出され、振り回されたのである。

Dickensは幼い自分を靴墨工場で働かせた父親を許すことは出来なかつた。そして自分の過去を振り払いたいともがいていた。彼の初期の作品の

主人公たちが逆境から社会的に成功していくのはそのためである。過去の辛い思い出から逃れるためには進んでいくしかなかったのだ。一方Waughはヴィクトリア時代の価値観に反発を感じつつもそこに回帰したいと望んでいたのである。彼は*A Little Learning*の“My Father”の章を次の言葉で締めくくっている。“There were times when I was inclined to regard his [father’s] achievement as somewhat humdrum. Now I know that the gratitude I owe him for the warm stability he created, which…can best be measured by those less fortunate than myself” (79)。父親への愛情を感じることなく育ったDickensはまさしく“those less fortunate”のひとりであった。Dickensが希求し続けていた「温かさ」や「安定感」がWaughには幼い頃から父親によって惜しみなく与えられていた。PaulとNicholasの運命は時代の違いを映し出していると共に彼らはWaugh、Dickensそれぞれの人生を背負わされていたのである。

注

本稿は、第22回甲南英文学会(2006年7月1日於甲南大学)における発表原稿に加筆訂正を加えたものである。

引用・参考文献

- Amory, Mark. ed. *The Letters of Evelyn Waugh*. New Haven: Ticknor, 1980.
- Beatty, Frederick L. *The Ironic World of Evelyn Waugh*. Dekalb: Northern Illinois UP, 1994.
- Berberich, Christine. “‘All gentlemen are now very old’: Waugh, Nostalgia and the Image of the English Gentleman.” *Waugh without End: New Trends in Evelyn Waugh Studies*. Eds. Carlos Villar Flor, and Robert Murray Davis. Bern: Peter Lang, 2005. 45-57.
- Clement, A. *The Novels of Evelyn Waugh: A Study*

- of the Quest-Motif. New Delhi:Prestige, 1994.
- Carens, James F. *The Satiric Art of Evelyn Waugh*. Seattle:U of Washington P, 1966.
- Carey, John. *The Violent Effigy:A Study of Dickens' Imagination*. London:Farber, 1979.
- Davie, Michael, ed. *The Diaries of Evelyn Waugh*. Boston:Little, 1976.
- Davis, Robert Murray. *Evelyn Waugh, Writer*. Norman:Pilgrim, 1981.
- . *Evelyn Waugh, and the Forms of His Time*. Washington, D.C.:The Catholic U of America P, 1989.
- Dickens, Charles. *Nicholas Nickleby*. Oxford:Oxford UP, 1987.
- . *Our Mutual Friend*. Oxford:Oxford UP, 1987.
- Garnett, Robert R. *From Grimes to Brideshead: The Early Novels of Evelyn Waugh*. Lewisburg: Bucknell UP, 1990.
- Heath, Jeffery. *The Picturesque Prison: Evelyn Waugh and His Writing*. Kingston:McGill-Queen's UP, 1981.
- Jolliffe, John. "What's in a Name?" *Evelyn Waugh and His World*. Ed. David Pryce-Jones. Boston:Little, 1973. 230-233.
- Kernan, Alvin B. "The Wall and the Jungle: The Early Novels of Evelyn Waugh." *Critical Essays on Evelyn Waugh*. Ed. James F. Carens. Boston:G.K.Hall, 1987. 82-91.
- Littlewood, Ian. *The Writings of Evelyn Waugh*. Totowa, New Jersey:Barnes, 1983.
- Lodge, David. "Evelyn Waugh" *Six Modern British Novelists*. Ed. George Stadem. New York:Columbia UP, 1974. 43-86.
- MaCartney, George. *Evelyn Waugh and the Modernist Tradition*. New Brunswick: Transaction, 2004.
- Magnet, Myron. *Dickens and the Social Order*. Philadelphia:U of Pennsylvania P, 1985.
- McDonnell, Jaqueline. *Modern Novelists: Evelyn Waugh*. London:Macmillan, 1988.
- Myers, William. *Evelyn Waugh and the Problem of Evil*. London: Faber, 1991.
- Patey, Douglas Lane. *The Life of Evelyn Waugh: A Critical Biography*. Oxford:Blackwell, 2001.
- Powell, Anthony. *To Keep the Ball Rolling: The Memorirs of Anthony Powell*. Chicago:U of Chicago P, 2001.
- Sadrin, Anny. *Parentage and Inheritance in the Novels of Charles Dickens*. Cambridge: Cambridge UP, 1994.
- Stannard, Martin. *Evelyn Waugh: The Critical Heritage*. London:Routledge, 1984.
- . *Evelyn Waugh: The Early Years 1903-1939*. NewYork:Norton, 1987.
- Stopp, Frederick J. *Evelyn Waugh: Portrait of an Artist*. London:Chapman, 1958.
- Sykes, Christopher. *Evelyn Waugh*. London: Collins, 1975.
- Waugh, Evelyn. *Decline and Fall*:London: Penguin, 1928.
- . *A Little Learning*. London:Penguin, 1983.
- Wilson, Angus. *The World of Charles Dickens*. Harmondsworth:Penguin, 1972.
- 村岡健次『ヴィクトリア時代の政治と社会』ミネルヴァ, 1983.
- 村岡健次・川北稔編著.『イギリス近代史——宗教改革から現代まで』ミネルヴァ, 1987.
- 佐々木徹.「ディケンズを読むウォー」『英語青年』1857号, 2003. 458-460.